

実践的な力量形成を目ざした教員養成の充実

－東京学芸大学及び立教大学における調査研究報告－

菊 永 俊 郎 [鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター]・塚 元 宏 雄 [鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター]

Enhancement of teacher training that aims at practicing ability formation

－Investigation research report in Tokyo Gakugei University and Rikkyo University－

KIKUNAGA Toshiro・TUKAMOTO Hiroo

キーワード：実践的科目群、履修カルテ、教職実践演習、キャリア形成、キャリア教育

1 はじめに

本学部では、平成19年度からスタートした「県教委との連携による新しい教員養成カリキュラムの開発・実施」事業を受けて、「実践的な力量形成を目ざした教員養成を行っている。

その際、鍵になってくるのが、学生が自らの力量形成を把握し、改善を図っていくかということである。また、そのための支援体制について大学側も整備されていることである。

そこで、本稿では、すでに全ての学生に履修カルテや面談を実施している東京学芸大学ならびにキャリア教育について見識の深い立教大学教授への調査研究を行った。

その中で、学生の自らの力量形成の把握や状況改善のための取組ならびに教職の実践的科目群について鹿児島大学教育学部との比較・考察を行いながら課題や成果を明らかにしていきたいと考える。

2 東京学芸大学との比較

共通して実施している実践的な力量形成を目ざした教員養成に関する取組の比較を通して、現時点での鹿児島大学教育学部における実践的な力量形成についての課題や成果を明らかにしていく。

比較等を行った項目については下記(1)～(3)のとおりである。

- | |
|---|
| (1) 平成25年度から完全実施の「教職実践演習」について
(2) 自己診断シートならびに面談について
(3) 履修カルテについて |
|---|

- (1) 平成25年度から完全実施の「教職実践演習」
(鹿児島大学では「教職応用研究」)について

東京学芸大学 (35講座開設)	
① 時期	4 年次後期
② ねらい	学生が学習履歴を省察しながら下記のことを確実に身に付ける。 ア 教員としての使命感や責任感、教育愛 イ 社会性や対人関係能力 ウ 子ども理解や学級経営等の能力 エ 教科指導等の能力にわたる教員として必要な知識技能
③ 授業の特徴	学校現場の実際を想定した授業内容の編成をし、次のことを積極的に取り入れる。 ア 現職教員等の教職経験者との交流 イ 模擬授業やロールプレイング ウ グループ討議

鹿児島大学 (現在は1講座のみ開設)	
① 時期	4 年次前期 4 年次後期
② ねらい	教師として最小限必要な資質能力が形成されているか、また、将来教師になる上で自己にとっての課題は何かを自覚し、必要に応じて不足している知識技能を補うことを目的としている。

③ 授業の特徴

これまでの履修や学びの状況を振り返り、その中から自己課題を設定し、附属学校等での学校支援活動やボランティア活動を通してその課題の解決を図り、学んだことをまとめ発表し合うことで学びの成果を共有し合う。

している。

② 自己診断ならびに面談

学年末試験での成績の後にWeb上から入力をする。その際、数値のみならず自分のコメントも入力する。それらをもとに学年をはじめに教官と面談を行い、助言を受ける。4年次に前期終了後に自己診断を行う。

＜比較＞

鹿児島大学教育学部においては、現在、選択科目の一講座のみを開講している。課題解決のための集大成として、この講義を実施している。それ故、あまり細目にこだわらず、個に応じた課題を解決させ、全体場において課題解決に向けた成果や課題の発表を行なわせるという流れをとる。授業参観や実際の授業の実施、児童生徒や支援教師とのかかわりを通して自分の課題を解決していくという流れをとっている。

また、東京学芸大学においてこの時期に行っている授業づくりや学級経営の策定については、鹿児島大学教育学部では選択講座「教職実践研究ⅠⅡ」において二年次から実施しており、実習前より実践的な指導法等を学ぶことも可能である。今後は、学生の必要に応じた再履修ができるようにできるようにになれば、スパイラル的に教師としての力量形成を図ることが期待できると考える。

さらに、平成25年度からの卒業生全員による必修科目ということを考えると模擬授業の実施や学級経営ならびに児童生徒へのかかわり方やカウンセリングなどの指導についても、各自の課題の課題をさらに深く焦点化させて解決していくための指導の工夫が必要とされる。

(2) 自己診断シートならびに面談について

東京学芸大学

① 自己診断の項目について

教職観、教科基礎力、学習指導力、子ども理解力、生活指導力ごとに5項目ずつの到達目標をあげ、4段階で自己評価できるように

鹿児島大学

① 自己診断の項目について

教職の理解、連携・協働力、自己改善力の育成、学習者理解、構想力、展開力・評価力、教科領域等の内容理解の5項目をあげ、19の項目を4段階で自己評価できるようにしている。

② 自己診断の方法

1年次の学校体験「教職基礎研究」や2年次の参加観察実習、3年次の教育実地研修、4年次の教職応用研究の前に自己評価を紙ベースで行わせている。また、教職支援室を開設し、個々の学生の相談にあたる体制をつくっている。

＜比較＞

東京学芸大学においては、すべての学生がWeb上から入力・蓄積ができるようなシステムになっている。また、各講義と「教員として身に付けておきたい資質能力」との連関がすべて明示されており、レーダーチャートで確認できるようになっている。さらには、学生の面談や自己評価の時期が明らかになっており、すべての学生の自己診断をもとに面談を行えるようになっている。学生によっては、自分の成績に比べて自己評価を厳しく付けてしまう傾向の者もいたり、自分の適正等に悩みをもつ者もいたりしており、今後はさらに教官による直接の面談での指導の重要性がより高まっているとのことであった。

鹿児島大学においても、「教員としての資質能力に関するチェック項目」（5カテゴリー19項目）明記し、自己評価に活用させている。学

生への相談体制については、担当による相談体制の二重三重の体制作りについて検討し、さらには「教職支援室」といった専従の相談支援員を配置するなど、学生支援する体制を行っている。Web上から入力ができるようになっているシステムはほとんど開発されているが、学生に十分に周知できているとはいえない。時期や方法についても検討し学生に早めに提示していく必要がある。

(3) 履修カルテについて

東京学芸大学
① 履修カルテ対象科目に予め設定される「修学達成度」を定量化し、当該学生の達成度をカテゴリー毎にレーダーチャートで表示するシステムになっている。 ② 年度ごとのレーダーチャートが残されており、当該学生が学習履歴をみることができる。

鹿児島大学
① Webシラバス上で科目選択・履修登録する際に、その科目が19項目のどの項目を担っているかを確認できるようになっている。 ② 各カテゴリーの習得状況をレーダーチャートで視覚的にとらえられるようになっており年度ごとの履歴把握が可能である。

＜比較＞

web上のシステムとしては、両大学とも同じような形になっているが、東京学芸大学においては学生による入力、自己診断、面談への流れができていた。年回、全ての学生一人一人の相談ができる体制もできている。

鹿児島大学教育学部としては、面談や活用の状況についてはまだ十分であるとはいえない。教職のみならずキャリア形成を図ったり振り返ったりする際の手がかりとなるよう各講義における「教員としての資質能力に関するチェック項目」を意識させる場面を設定することで、教師としてより実践的な力量形成につながって

いくと考えられる。

今後は、学生が十分に身に付けることのできなかった項目については、講義の「教員としての資質能力に関するチェック項目」を一覧表を作成し確認できるようにするなどしながら、学生にとっての利便性をより高めたい。

3 実践的な力量形成を旨とした鹿児島大学での特色ある取組

鹿児島大学教育学部では、教育実習以外にも下記のような特色ある実践的科目群等を通して系統的・計画的な学生の教職に関する力量形成を図っている。ここでは、主な取組と成果や課題についてあげていきたい。

鹿児島大学
① 講義「教職基礎研究」 → 大学1年次には3日間の学校体験を実施し、その後、プロジェクト学習による課題解決を行わせるといった教職についての意識をもたせる講義を実施（教職基礎研究） ② 講義「教職実践研究Ⅱ」（Ⅰ・・・教科指導、Ⅱ・・・学級経営） → 2年次に選択科目として、模擬授業や学級経営に関する講義を設定し、より具体的な力量形成に努めさせている。 ③ 自主講座「教員養成基礎講座Ⅱ」 → 2・3年次にはオムニバス形式（各15講座）の自主参加講義を設定し、教師として身に付けていきたい知識や考え等を学ばせる機会を設定している。計100名の学生に対して、大学・県内の約30名が講義を行っている。毎回の講義の学生の感想の抜粋を参加者に配布している。

＜成果や課題＞

教職基礎研究については、1年生ということで、教職に関する意識をもたせるきっかけとなっている。また、グループでのコミュニケーションを大切にした課題解決やプレゼンを行わせている。課題解決や指導法改善のためのワークショップ的な手法についての研修の在り方に

については今後、工夫改善の余地がある。グループ内での問題解決の手法等についても今後も取り入れていながら学生の力量形成を図りたい。

また、教職実践研究ⅡⅡ学生にとって、現場に出てからのことを考えると特別支援教育に関する知識やカウンセリングの技法、板書や発問、電子黒板の使い方など具体的な指導技術等について、さらに計画的・系統的に積み上げさせていきたいと考える。

教員養成基礎講座ⅠⅡは自主講座ではあるが学生の教職への意識向上や基礎的な知識獲得に大きな成果を出していることが下記のような学生の感想からもわかる。今後は、「教員としての資質能力との関連性をもたせながらさらに計画的・系統的な講義を計画していきたいと考える。



教員養成基礎講座Ⅰ

～第10回講座受講生からの感想・意見から(抜粋)～



平成23年7月20日(水) 第10回講座「国と本県の実践的教職教育と特徴(生徒指導)」
講師：鹿兒島県教育庁義務教育課 常楽 進 先生

出 会

○ 今回のこの講義を受けて本当に良かったなと思いました。そして、常楽先生に出会えてよかったなと思いました。私はこれまで生徒指導に悪いイメージをもっていました。でも、もっと明るく見ていこうとおもいました。大学に来て忘れていた気持ち(こういう先生になるんだという気持ち)を思い出そうことができました。心と能力どちらも磨いて、教師をめざします。また、お会いしたいです。ありがとうございます。

○ 今回の講義は、昔の自分を思い返す何か不思議な感じがしました。つらい時、何か疲れた時に親にやっあたりしていた時もあり先生にもよく怒られることがありました。その時、自分に生徒指導をしてくれた先生が自分に教えてくれた大切な言葉がありました。それは、「感謝の心」です。この言葉を胸に刻んで以来、自分を変えることができました。鹿兒島弁の上手な授業で楽しかったです。

○ 自分が書いているこの感想を見ながら生徒って、やはり先生をしっかり見ているのだなあと思いました。今日の講義で聴かせていただいた数もすごく良いなと思ったので、ノート等で2つとも隠して見ようと思います。本当に良いお話をありがとうございました。

心 にかかわる

○ 2曲の歌を聴き、心にグーンとききました。人はやはり一人では生きていけないことと交えて生きていかねばならないこと、愛の重みを感じました。高校の時「肩をいじる暇があったら勉強をしない」と言われたことがあります。今、思うと先生は私だけでなく教え子にきちんと羽ばたいてほしいという期待をしてくれていたのだなあと思いました。学校生活でたくさんの愛をもらったので、次は私が教師になって生徒にたくさん愛をもって接したいと思います。

○ 「生徒指導」という言葉によいイメージはありませんでした。常楽先生のお話を聞いて「生徒指導」が本当はどんなものかを知ることができました。自分のこと友だちのことを好きになって、「しあわせ」という歌のように、生徒たちが楽しんで過ごせるような指導がしたいです。教師の行動の一つ一つが生徒指導になることや、人が変わる「きっかけ」が大切だということがとてもよくわかりました。「思春期」「反抗期」といったことばで片付けるのではなく、生徒一人一人と向き合える教師になりたいです。常楽先生の笑顔と指づちを見習おうと思います。

子 どもの立場

○ 子どもを教育する際に絶対に子どもを否定してはいけないと改めて思った。問題を起こす子どもには、必ず裏に理由があり、まず子どもを理解してあげることが大切だと感じた。子どもに関わりすぎれば反抗の心を持たせてしまうし、全く関わらなければ、見捨てられたと勘違いされてしまう。教師は、その子どもを成長させていくために、きっかけを与えて、いつも子どもたちの立場に立っていくことが大切になると思う。子どもを見下して上から押さつけるのではなく、子どもの立場に立ち良心と訴える方が教育としてとても効果的だと思った。



<教員養成基礎講座の学生の感想>

4 キャリア教育と鹿兒島大学の実践的教職科目

これまで述べてきた、本学の教員養成の実践的教職科目に対し、立教大学大学院教授、筑波

大学キャリア支援室シニアアドバイザー渡辺三枝子教授のキャリア教育の観点からの考え方や主張を踏まえ、私見を交えて、省察していくことにする。

(1) キャリア教育の考え方

これまでに行われてきた、生徒指導、進路指導、職業指導などの積み上げは、将来の生き方や職業選択等を含めたキャリア形成について、それなりの成果をあげてきており、学校教育活動の一環として大切にしたいものである。

一方、社会や企業で求め望まれる資質能力の育成においては、高等教育機関に目が向かっている現状のなかで、学生は就職や人生への不安や悩みを抱えながらも、自分なりの学修目標や課題となる資質能力の獲得を図りながら、よりよい社会形成の一員としての自己実現を図ろうと模索していることも、大学では現実視することができる。

特に教職志願者は、大学以前の学校生活の中に、その教職志願の芽生えがあり、これまでの育ちの中での生き方教育なるものを受けてきている。また、子どもたちのこれまでの知識獲得や体験・経験、自己決定等などの学びや望ましい発達、段階を踏まえて伸びていくものであり、キャリア形成と直結していると考えられる。これらにかかわる教員という職業は、その意図的なキャリア形成と密接に関係し、大きな影響を持つことを念頭に置くとき、小・中・高校・大学、その後の進路までを通した生涯のキャリア形成を図るキャリア教育を、有機的・体系的に考え、中核となって推進していく必要がある。

これらのことから、これまでの進路指導やキャリアガイダンス・カウンセリングを含めて、キャリア教育を教育改革の方針・理念としてとらえ直し、本学の実践的教職科目においても充実に向けたカリキュラムや指導法の更なる工夫・改善が必要であると考える。

(2) キャリア教育と教職基礎研究

大学での理論と教育現場における実践との往還的学修を橋渡しする実践的教職科目群において、大学1年次後期に行う3日間の学校体験を

取り入れた教職基礎研究は、学びと同時に職業や採用といった教職を意識させ、それに向かうべき自己の学修の見通しや現在おかれている状況・課題を自覚させ、更なる学びに結び付けるといった重要な教職入門期の科目である。

この入門期に、これから目指そうとする教職というものの存在を教師という職業から見つめさせ、学生がこれまでに大切に抱いていた願望や希望に基づき、意図的な観察や子どもとの触れ合い体験をさせ、自分の見えにくかった将来像や適正、努力・工夫、生き方などを考えさせることになる。

本学でも、学生への目的意識や4年間の見通しを持たせた入門期と位置付け、目指す目標や資質能力の設定、評価の方法等について実践を積み上げてきている。また、学生が卒業までの間、自分の教職としてのキャリアを見つめながら、これまでの各自の歩みを自己評価できる「教職課程履修カルテ」を作成している。

このカルテの活用に当たっては、webを通した履修支援システムおよびキャリア支援体制の構築を進めているところである。

これらを更に有機的に関連させながら、学生側から見た職業選択や進路である教職としての適性や不安等を自ら解決させていく道筋を示したり、自覚の持たせ方や学ぶことの重要性について考えさせたりする機会を、本科目の授業の中にも反映させていくことも考えられる。

そこで、学生に本科目の中で明確なキャリア意識を持たせると同時に、大学教員もキャリア形成に向けたガイダンス的科目として共有し、大学入学前に考えていた教職観などと比較・検討させるようなグループ討議や意見交換等の活動を授業の中に取り入れ、自分の進路や考え方・意識付け、学びの方向など、教職やその職能に正面から向き合う授業内容の更なる創意工夫の余地があると考えられる。

(3) キャリア教育と教職実践研究Ⅰ・Ⅱ

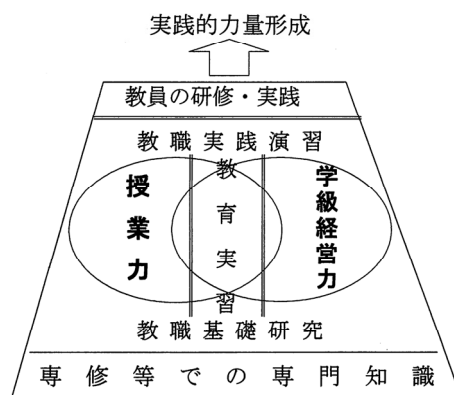
本学が、2年次に自由選択履修科目として行っているもので、授業構成員や学級経営力の資質能力を高める、実践的科目である。

教師の大きな実践力を発揮する授業づくりと学級づくりは、望ましい集団生活や人間形成を促す上で欠かせない教師の仕事である。また、学校教育において、この授業と学級経営は子どもへの直接的な教育作用として大部分を占めており、この中で、あらゆる教育効果を望み求めて意図的・計画的に推し進められている。

ましてや授業成立しない学級となると、担任の責任は重くのしかかり、保護者や地域からは早急な改善を学校現場や教育委員会等へ求めて来る例は少なくない。学校長としては、教職員定数との関連からも、前提として「授業がうまく学級担任のできる先生」を望んでいるのが現状である。下図はその構図として例示してみた。

したがって、授業力・学級経営力は現職教員の前提となる力量であり、早期からその両輪で力を付けていくことが問われていると考えられる。

教師の大きな力 授業力と学級経営力は両輪



＜教師の実践的な力量形成＞

これらのことから、教職のキャリア形成を進めるに当たっては、授業力・学級経営力は重要であるが、先ほど述べたように、あらゆる教育効果を求め望まれることから、2年次の基礎的知識としての教職実践研究をどこまでの範疇として求めていくかが問題になると考える。

そこで、本科目で培う資質能力を、時代を超えた普遍的なものと時代の状況に応じて求められる不易と流行の観点や、豊かな人間性や社会

性の重視として求められるなどの観点を、フィルターにかけ、教職の力量形成過程の中で、学生の学びの実態に応じて、順次的・関連的に仕組むことであろうと考える。

本学においては、基本的な授業づくりや学級づくりの理論の学習を基に、模擬体験を通し、学びを振り返り深化させていく過程を仕組んでいるが、変化する社会への対応や豊かな人間性・社会性といった多様な知識経験を含む学修については、今後の実習や教職実践演習との関連を図っていくことが大切であると考え。2年で行う本科目においては、これまでの専修での学びと実践力との往還を考えた力量形成過程が重要で、この模擬体験を通すことの必修化の考え方や専修の学び・教職基礎研究との関連を図る授業設計、更には模擬体験後の自己評価と連動した振り返りや課題の明確化のためのグループ討議など活動の軽重や時間配分など再考していくことも重要であると考えられる。

(4) キャリア教育と教職実践演習

教職実践演習は、これまでの教職の学修等で身に付けた資質能力が、教員として有機的に統合・形成されたか最終的に確認し、深化や補充すべき課題等を明確にし、必要に応じて知識や経験・技能等を補い、間近にスタートする教職生活を円滑にできるようにすることを目指したものである。

この授業は、Ⅷ期（4年次後期）に設定されることになっており、本学では、平成19年度に「教職応用研究」と名称し、22年度から24年度までの3か年間は、教育課程上「総合講義」として試行・実践を積み、必修科目となる25年度へスムーズな移行ができるよう取り組んでいる。

試行段階の初年度に当たる22年度から、本学で必修科目となる5コース・14講座中のEコース（協力校におけるティーチング・アシスタントなど、継続的な観察・指導補助等の活動を通じて、教師としての全般的な力量形成を図る。）を選び、模索してきた。

実践の成果としては、目標に沿った学生の課題設定から学校支援活動の在り方、評価の考え

方・方法等についての授業構成のモデルを示すことはできたと考える。

今後は、このモデルを土台としながら、教職の大学における最終段階としてのキャリア形成として、授業構成を考え、学部担当教員相互や協力校担当者との連携を深めながら、学生の持つ課題や学びのニーズに細かく対応していけるような授業運営を心がけていく必要がある。

特に、課題追究に有効な支援活動の設定方法、支援活動中における課題解決状況の見取り方等については、今後さらに実証的に研究していく必要があろうかと思う。

5 おわりに

「実践的な力量形成を目指した教員養成」について、実践的教職科目群の取組を東京学芸大学や立教大学の渡辺教授の考え方等を基に比較・検討し、本学の更なる充実のための成果や課題、省察による今後の方向を述べてきた。

本学においても今後、学生生活4年間の学習・学び・経験を意味づけていくキャリア形成の重要性を認識し、教職としての知識・技能や職業人として生き方を学ぶ自覚など、様々な場で有機的に関連させ、よりよい方向に向けた学生の支援を意図的・計画的・組織的に仕組んでいくキャリア教育の観点からの工夫・改善が必要であると考え。

そこには、webを通したカルテや自己評価等のシステムづくりを基に、面談や相談、ガイダンス、情報提供など様々な手法があるが、キャリア教育を推進していく上で、実践的な力量形成過程を仕組んでいるカリキュラム構成や指導内容、その形態の中でも取り入れられることに、大きな意義もあるように思う。

この実践的科目群が教職のキャリア形成に大きな効力を発揮していくためには、学生の具体的な可視化を進めるためのシステムづくりと同時に、段階的・順次的なシラバスや授業構成の工夫・改善を通して、効果的で定着度の高い職能形成の学びにしていくか、これまで以上に実践的な検証を通して充実させていくことが求められると考える。